

カムパネルラ

Vol.10 2009年5月号

- 「親」の思い・・・・・・・・・・・・・・・・・・本図 愛実
- 手紙が届いた...・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- ごきぶりねえさんに拍手！・・・・・・・・・・松井 かおり
- 生きることの意味を考えさせてくれるこの一冊・・・・・・・・牧野 七恵
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

■ 「親」の思い

本図 愛実

教職についての学びが広がり、学校という視点から教職について考えるようになってくると、「親」が学校教育の成立に大きな役割をはたしていることに気づきます。

本学で学ぶみなさんが、教師の仕事に魅力を感じ、教師になろうと思ったのは、どのような経験からでしょうか。おそらくその経験の多くは、教育を受ける側(子どもあるいは子どもたち)と、教育を与える側(教師)という二者からなる活動や関係に関わるものであったらと思います。

しかしながら、みなさんを教職志望へといざなった活動や関係は、教育を受ける側と教育を与える側のどちらにも属さないように、実はどちらにも属している「親」たちが、健全なふるまいをしているという前提条件のもとに成り立っているのです。

そのような位置にある親たちを理解し、さらには、学校教育の一部を担う者としてつきあっていくことが、今日の学校および各教員に課せられています。(詳細は「教育の制度」にてお話することとします。)

昨今、親の奇抜な行動がメディアをにぎわせていますが、実際に教師として遭遇したわけではないのに、メディアが報ずるもの、あるいは伝聞から、親に対して、無用な恐れや偏見をもってほしくないと思っています。

そんな考えから学生のみなさんに本書を授業等で紹介しています。

本書は、親が、わが子の誕生からその人生の終わりまで、どのような思いを抱くのか、一見、距離をおいたような、やや抽象的な表現と軽いタッチのイラストのなかで表わされています。ただし、それは直接的に表わされているのではなく、読む者自身の記憶や感覚をよびおこしたり、想像をかきたてたりするなかで表現されているように思います。たとえば、



みちを わたるとき、
あなたは いつも
わたしの てに しがみついてきた。
いつのまにやら あなたは おおきくなって、
わたしの あかちゃんは、わたしの こどもに なった。

と書かれている頁があります。私の場合は、これらから、まもなく6歳になる息子と手をつないだ時の感触が思いおこされます。ついこの間まで小さくて柔らかだったのに、いまや、肉厚の、がさがさとした手ざわりなのです。寒空の中も手袋なしで平気で外にとびだしていくからでしょうか。つまりは「ごつい」のですが、じき手をつなぐこともなくなり、がさがさかどうかもわからなくなってしまうのだらうと思うと、ハンドクリームをすり込みたくなるようなそのがさがさも愛おしく、頼もしく思えてきます。と同時に、少しばかりの淋しさも湧き上がってくるのです。

さらに本書は、子の成長とともに、親は、それを見守る適度な距離を模索していかなければならないこと、それがそう簡単でもなさそうだということをこっそりと伝えてくれているようにも思います。それはまた、見方を変えると、親とは、そのような課題から解放されない、未熟な、愛すべき存在なのだなとも思えるのです。

教師になった時、親も日々戸惑い成長しているといった、大らかな見方を持ち、親とともに学級づくりができるといいのではと思っています。

「ちいさなあなたへ」アリスン・マギー・文/ピーター・レイノルズ・絵/なががわちひろ・訳/主婦の友社

(学校教育講座)

手紙とは、はがきとは、外から届くもの、外へと届けるもの。そうして外の世界とのつながりが生み出されるもの。異界からの招待状の形をとることがあるのはそのためと言えます。一郎に山猫からののがきが届きます。宮沢賢治「どんぐりと山猫」です。「雪渡り」では、四郎とかん子が小狐から幻燈会への招待状をもらいます。そこには11才以下との条件が付いています。紅葉の葉に書かれ、川を流れてくる手紙は、安房直子「うさぎ座の夜」での、小夜へと届く人形芝居うさぎ座からの招待状です。「これは こどもだけしかゆくことができない」、おばあさんは小夜にそう語ります。異界からの招きに応えることができる心の持ち主は子どもだけ、ということに違いありません。



筒井頼子作・林明子絵『とん ことり』(福音館書店)では、知らない町へ引っ越してきたかなえのもとへ、「とん ことり」の小さな音とともに「手紙」が届きます。届いた「手紙」はすみれの花束です。「ゆうびんやさんの おとがした」、かなえは走っていき、ドアを開けます。「にわの むこうは、しらない とおりで、しらない ひとが あるいているだけでした。」今度はたんぼぼが3本届きます。「おもての とおりには、やはり、しらない ひとが あるいているだけでした。」母に手を引かれて、初めて買い物に出ます。「しらない まち、しらない いえ、しらない こたち——なにもかも、かなえの しらない ものばかり。」

かなえを見ている女の子が、そこにほんの小さく描き込まれています。ページを逆にたどる、たどって探すことでそれがわかるほどに小さくです。「とん ことり」、また手紙が届きます。今度は本物の手紙です。かなえは「なんども なんども、そのてがみを、よみかえしました。」幼稚園に行きます。「あのてがみを くれたこが、どこかに いると いいなと、おもしろいながら、しらない こたちを ひとりひとり みていました。」ここにも、ものかげからのぞく女の子が描き込まれています。「とん ことり」、今度は折り紙の人形です。「しらない おんなのこが、もんから でていこうとしているのが みえました。」かなえは「まって・・・」と声をかけます。「おんなのこが、ゆっくり ふりむきました。」一挙に世界が広がります。黄一色の花畑の小道を、並んで自転車のペダルをこぐかなえと女の子、二人のはずんだ心が伝わってきます。「とん ことり」は手紙の音、と同時に、かなえの心の扉が開いた音なのです。

配り終わったはずの郵便やさんのかばんに、薄緑色の封筒が残っています。宛先は、「やまおくむら どんぐりやま さらさがわ のぼる いっぽんばし わたり しからかばば やし めける ぶなの もりの おく おおぶなの き した ごろう さま」です。どれほど遠くとも、届けに行かなければなりません。「さらさがわなら してるよ」、道案内役を買って出たかわうそが、バイクの後ろのかごにとび乗ります。「しらかばばやしなら、してるわ。」道案内のうさぎがとび乗ります。「ぶなの もりなら してるよ。」りすが乗ります。雪が深くなり、バイクを降りて歩きます。「おおぶなの きは こっちだよ。」道案内してくれたのはきつねです。眠くてたまらないくまに頼まれ、郵便やさんが開いてみると、薄緑色の便箋が。そこには、「はるですよー！」とありました。「ゆうびんでーす！」の声とともに手紙を届ける郵便やさんは、春を届ける郵便やさんでもあったのです。冬眠中のくまに届いたこの手紙は、誰からだったのでしょうか。間瀬なおかた『ゆうびんでーす！』(ひさかたチャイルド)の世界です。



ディック・ブルーナ文・絵、松岡享子訳『うさこちゃんの手紙』(福音館書店)は、キャンプにやっ

て来たうさこが、両親に書いた長い手紙からできています。「ここには ちょうちょが たくさんいます。あかいの、しろいの、みどりに きいろ。」「かめも みました。すぐそばで。かこいに はいっているのでは ありません。」うさこは見たこと、聞いたことのすべてを両親に伝えようとします。伝えられるものはごくわずか、伝え切れないもどかしさがこみ上げてきます。それでもよく伝わるのです。両親が想い描くからです。読み返すこともできます。読む度に相手を想う心の輪が広がる、それが手紙なのです。

「とん ことり」筒井頼子・作／林明子・絵／福音館書店

「ゆうびんでーす！」間瀬なおかた・作・絵／ひさかたチャイルド

「うさこちゃんの手紙」ディック・ブルーナ・文・絵／松岡享子・訳／福音館書店

(英語教育講座)

■ ごきぶりねえさんに拍手！

松井 かおり

まずタイトルにどっきり。でも、イランではよく知られた昔話だそうです。ごきぶりが主人公という絵本との出会いに感動です。その絵は独創的で、ごきぶりねえさんの姿は想像以上に魅力的です。たまねぎの皮で作ったバラ色のワンピース、なすの皮を縫って作ったチャドル（全身を覆う布）ほそばぐみの皮で作った真っ赤な靴、実物を知らない人だったら、ごきぶりが好きになるかもしれません。そして、日本語訳は小気味よく、どこか懐かしいことばの響きがあり、自然と声にしてみたいくなります。

これは、ごきぶりねえさんが旅に出る話。てんとうむし、くも、しじゅうから・・・など、たくさんの出会いと危機の連続です。例えば、くもとの出会いはこうです。



「ごきぶりねえさん どこいくの？」

「ごきぶりねえさん?! ひどすぎる！」

「じゃ、なんと？」

「おじょうさん、あかぐつさん、ヤズド（イラン中部の町）のチャドルさん、道中ごぶじに。どこいくの？」

そのくもの網にかかり、丸呑みにされてしまうことをカラスが教えてくれます。「ごきぶりねえさん、こわくなって、にげだした・・・」次は誰と出会い、何が起きるのか？読み聞かせにはぴったりの繰り返しです。ごきぶりねえさんの決まり文句、「じぶんで ちゃんと やっていく。どんな くろうも いとわない。ひとに へつらったり しない。」も、あくまで自然体。きっと小さい頃から、それが当然なことと育ってきたのだと想像するのです。

これは自分の居場所を見つける旅のお話。この旅の果てを、子どもたちはどう思うでしょう。大人たちは今の自分の生き方に思いを馳せ、何かしらのメッセージ性を込めて読みたくなるかもしれませんが、ごきぶりねえさんの「旅」をごくごく楽しく、生き生きと伝えられればいいなと思います。子どもたちが大きくなった時、いつか読んであげたい話です。

ごきぶりねえさんは、人にへつらわないように、しっかり仕事して、苦労して、小さくても気持ちのいい家を持つという、子どもの頃からの願いをかなえます。母親を呼び寄せて一緒に暮らすことになった、その旅へと向かわせた「ごきぶりかあさん」のことばです。

わかい おまえが なんにも しないで ぐずぐずしてる、っていうのは ざんねんなこと。たちあがって 手をうごかしな。じぶん じしんを アピール するのさ。かがみを みがいて、みじたく するんだ。

小さなごきぶりねえさん、かなりしっかり生きてます。

「ごきぶりねえさん どこいくの？」M.アーザード・再話／モルテザー・ザーヘディ・絵／愛甲恵子・訳／小野明・監修／ブルース・インターアクションズ(1,470円)

（附属特別支援学校教諭）

■ 生きることの意味を考えさせてくれるこの一冊

レオ・バスカーリア・作 / 島田光雄・絵 / みらいなな・訳『葉っぱのフレディ - いのちの旅 - 』（童話屋）

牧野 七恵

「死」は、すべての生きものにやってきます。生まれて、死んでゆく。それは何十億年も前から繰り返されてきた、当たり前のことです。しかし、自分や家族、愛する人が死んでしまったら。そう考えたとき、恐怖や不安を感じずにはいられません。『葉っぱのフレディ——いのちの旅——』は、「死」に対するそうしたネガティブなイメージに穏やかな光を与え、生きることの意味を考えさせてくれます。



フレディは、一本の大きな木の枝に生まれた葉っぱです。同じ木の枝に生まれたたくさんの友だちと、春には風に乗ってくるくる踊り、夏には身を寄せ合って人間に木陰を作り、秋にはきれいに紅葉し、季節の移ろいを感じながら毎日を楽しく過ごしています。

しかし、やがて冬がやってきます。仲間はずっとと風で巻き上げられ、地面に落ちてゆきます。親友のダニエルは、「引っこしをする時がきたんだよ。」とフレディに言います。冬が来れば、葉っぱはひとり残らず木からいなくなるのです。フレディは、ダニエルの言う「引っこし」が「死」を意味することを悟るのです。

木には、フレディとダニエルだけが残ります。「ぼく 死ぬのがこわいよ。」そう訴えるフレディに、ダニエルは「きみは春が夏になるとき こわかったかい？ 緑から紅葉するとき こわくなかったろう？...死ぬというのも変わるものの一つなのだよ。」と言います。そして、たとえ自分たちは死んでしまっても、「いのち」は変化しながら永遠に生き続けていくのだ、と優しく諭してくれるのです。

フレディは、自分の一生にはどんな意味があったのだろうかと考えます。「ねえ ダニエル。ぼくは生まれてきてよかったのだろうか。」フレディのこの問いに、ダニエルは深くうなずきます。たった一度ずつしか季節の変化を迎えられなくとも、フレディは満ち足りた気持ちで「死」を迎えます。雪どけ水に混じり、木を育てる力となるのを知ったからです。

（社会科教育専攻4年）

■ 新刊紹介

薫くみこ・作 / 黒井健・絵『赤いポストとはいしゃさん』（ポプラ社）

休みの日でも診てくれる、評判の若い歯医者さんがいます。手紙を書くのを苦手としています。お母さんへの約束の手紙がなかなか書けず、「宿題」を抱えたままになっているのです。その宿題と一緒にしてくれるのは、治療が終わっても帰らず、母親の帰りを診察室で待つ女の子です。ようやく書き上げた手紙をポストに入れ、女の子と手を振って別れると、「あわい ひかりが、ポストにとまって きえました。」その時、りすの声が聞こえてきます。「これはゆめでは ないかしら」、歯医者さんはそう思います。そうかもしれません。赤いポストをりんごとまちがえてかじり、前歯が欠けてしまったりすの子どもを治してやるのは、夢の中でのこととしか考えられないからです。お父さんりすがお礼にとくるみを差し出します。それで足りないのはわかっています。「それなら ぼくの おかあさんに てがみを かいてくれませんか。」歯を治してもらった、その代わりとしての手紙です。女の子とりすの子がパラレルになっているのがわかります。あずかってもらっているお礼、治してもらったお礼、お金の代わりとしての手紙なのです。



12時になろうとすると、ポストがやってきます。「さいごの しごとに ふさわしい、すてきな てがみを あずかってきました。」歯医者さんは、ポストの大きな口をのぞき込みます。口の中をのぞくのは歯医者さんの仕事です。「わたしにも むしばが あったら、せんせいの かんじゃになれたのに」、ポストのそのことばから、女の子とりすの小さな口、ポストの大きな口が結び合っているのが見えてきます。亡き父に宛てたはがきの返事を持ってきてくれたポスト、そのポストに一杯に詰まったなつかしい思い出から覚めた歯医者さんは、ポストが「さいごの しごと」と言っていたことを思い出します。新しい形のものに取り替えられようとしていたのです。動物たちがポストを運びます。以来、待合室にポストが置かれるようになったのです。時々、不思議な足跡が。見えているのは、ポストをはさんで動物とつながっている歯医者さんだけなのかもしれません。

ポストはつなぐ役目を果たすもの。投函すると遠い人とつながります。そのポストが歯医者さんと動物をつなぎ、現在と過去をつないでいるのです。12時にやってきたのも、境としてのポストだからなのです。

（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館